

新しい眼で『暗夜行路』を

秋山 駿

ことしから無明塾が消えてしまつた。残念なことである。無明塾では、本堂にぎつしりとお集まりの方が、わたしの不器用な話を、ときにその不器用さをいたわるかのように深くうなずきながら、聴いてくださった。心の交流が果たせたと感ずることがあった。こんな思いが生じたのは、この無明塾だけである。

実は、わたしは、もうすこし考えが熟したら、無明塾でお話してみたいと思う題目があった。それは、『暗夜行路』と私哲学』というのである。以下は、その一半である。

わたしはずつと長い間、日本近代文学の歩みについて、一点の疑問を強く抱いていた。それは、——「私小説」が純文学として全盛になったのに、なぜ、それと同時に、「私哲学」といったものが盛んにならなかったのか、という疑問である。哲学というものも、「私小説」の理想と同じく、——人間の真実を探究し、

わたしはずつと長い間、日本近代文学の歩みについて、一点の疑問を強く抱いていた。それは、——「私小説」が純文学として全盛になったのに、なぜ、それと同時に、「私哲学」といったものが盛んにならなかったのか、という疑問である。哲学というものも、「私小説」の理想と同じく、——人間の真実を探究し、人生の真相を描く、ということをもっとも非凡な作品は何か。それは、

志賀直哉の『暗夜行路』である。どうか「私哲学」という視点を持ってこの作品をもう一度読んで下さい、とわたしは願っている。

折から、ことしの芥川賞に西村賢太『苦役列車』があり、わたしが出講するカルチャースクールでも、評判だった。

作品の主題は、「自分の生の惨めさ」と正面衝突している主人公の、生の苦しみを描くことであつた。

そこでわたしは、『苦役列車』と共に、梶井基次郎『檸檬』、『暗夜行路』を加え、三作をテキストにして、主人公が、「自分の生の惨めさ」とどれだけ深く衝突しているかを、比べてみるよう、生徒さんに要請した。

わたし自身も再読し、ことに作品の前篇（第一、第二）で、そうか、謙作はこんなに深い精神のドラマを演じていたのか、と、改めて感動した。

とにかく、徹底して、「自分の生の惨めさ」と衝突し、深く掘り下げ、身動きできない。そんな自分を打破して、外へ一歩を踏み出そうとすれば、病者に陥るか、犯行へ走る他はない、そんな地点にまで自分を追い詰める。

「彼にとつては、根こそぎ、現在の四囲から脱け出る。これより道

はない気がするのだ。二重人格者が不意に人格が変わってしまふ、そのように自分も全く別の人間になる。どんなに物事が楽になることか。今までの自分、——時任謙作、そんな人間を知らない自分、そうなりたかつた。」

これほど徹底して、「自分は何者か」を追求した文学、日本の近代文学では他に見当たらぬ。「自分は何者か」と問うところに、「私哲学」が生じた。

これはわたしだけの感じかもしれないが、「私哲学」を追う謙作の思ひには、「私とは何か」という難題を繰り返して自問自答している、パスカル『パンセ』の言葉に似通つたものがある。

——さて、急所の問いがある。志賀は、何のために、「時任謙作」という人物を創造し、「惨めな生」の苦しさを追求したのか。

小林秀雄「志賀直哉」に、明晰な答えがある。この作品の制作意志は、「幸福の探求である」と。つまり、作家は、惨めな生の底から見出せるような、「幸福」を、自分のために探すのではなく、われわれへと分かち与えようとするのだ。立派な文学（者）の態度であり、非凡な制作であつた。

(文芸評論家)